

佐賀県研究成果情報

|  |    |    |    |     |              |
|--|----|----|----|-----|--------------|
| カンキツ品種「天草」の肥大促進のための早期摘果技術  |    |    |    |     |              |
| [要約] <u>ハウス</u> で栽培された「 <u>天草</u> 」は、満開後 50 日位に <u>早期摘果</u> することで <u>果実肥大</u> が優れ、収穫時の <u>階級</u> も大きくなり <u>収量</u> が増加する。 |    |    |    |     |              |
| 果樹試験場・常緑果樹研究室  |    |    |    | 連絡先 | 0952-73-2275 |
| 部会名  | 果樹 | 専門 | 栽培 | 対象  | その他のカンキツ     |

[背景・ねらい]

ハウス栽培された「天草」等の中晩生カンキツ品種は、商品性の向上を図るために、大玉果の生産が必要である。そのため、「天草」の果実肥大特性を把握し、適正な葉果比や摘果時期について明らかにする。

[成果の内容・特徴]

1. 満開後 50 日頃に行う早期摘果は、加温、無加温栽培に関係なく満開後 65 日頃に行う後期摘果より果実横径は大きくなり、収穫時まで維持される (図 1、図 2)。
2. 収穫時の階級は、早期摘果することで M、L 階級果の割合が減少し、2 L 階級果以上の割合が増加する (図 3)。
3. 収穫時の果実品質及び収量は、早期摘果区で果実肥大が良好であることから、やや糖度が低くなるが、収量は増加する (表 1)。

[成果の活用面・留意点]

1. 「天草」のハウス栽培に活用できる。
2. 気象条件等により生理落果が遅くまで続く場合には、落果状況を確認しながら摘果を行う。
3. 過度の摘果は、果実品質の低下を招く恐れがあるため注意する。
4. 仕上げ摘果も必要に応じて実施する。
5. 適正な葉果比については、平成 13 年度の成果情報を活用する。

[具体的データ]

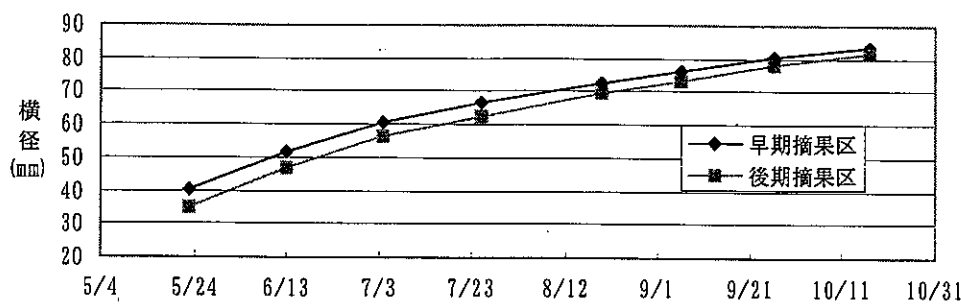


図1 摘果時期の違いが果実横径に及ぼす影響 (2002年 加温栽培)  
注) 摘果は早期摘果で5/7 (満開後52日)、後期摘果で5/27 (満開後66日)

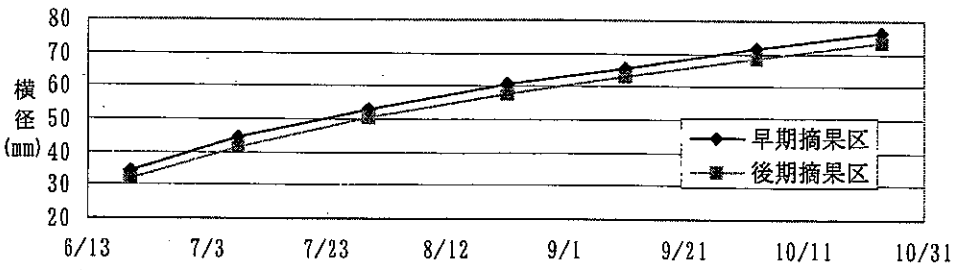


図2 摘果時期の違いが果実横径に及ぼす影響 (2002年 無加温栽培)  
注) 摘果は早期摘果で6/13 (満開後49日)、後期摘果で6/27 (満開後63日)

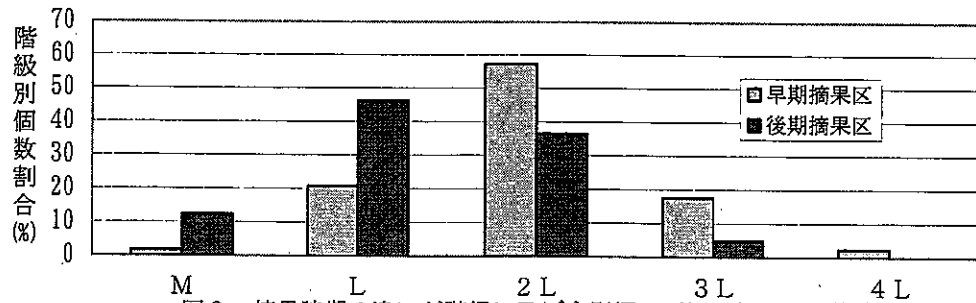


図3 摘果時期の違いが階級に及ぼす影響 (2002年 加温栽培)

表1 摘果時期の違いが収穫時の果実品質・収量に及ぼす影響 (加温栽培 2002.11.18)

|            | 果実重<br>(g) | 横径<br>(mm) | 着色<br>(a 値) | 糖度<br>(Brix) | クエン酸<br>(%) | 収量/樹<br>(kg) |
|------------|------------|------------|-------------|--------------|-------------|--------------|
| 早期摘果       | 288.6      | 86.7       | 25.1        | 11.1         | 0.91        | 58.6         |
| 後期摘果       | 271.3      | 81.6       | 25.0        | 11.5         | 0.92        | 47.2         |
| 有意性 (t 検定) | n.s.       | *          | n.s.        | *            | n.s.        | —            |

注) \*は5%水準で有意差あり

[その他]

研究課題名：新中晩生カンキツの施設利用による高品質安定生産技術の開発  
 予算区分：助成試験 (新技術地域実用化)  
 研究期間：平成11～15年度  
 研究担当者：平野稔邦・池田繁成・新堂高広  
 発表論文等：平成14年度常緑果樹試験研究成績概要集